

第三章 啓蒙的組織としての学会、報刊、学堂

第一節 概 観

本章においては、啓蒙的組織としての学会、報刊、学堂を取り上げる。

中国においては、伝統的に儒教にもとづく教化が行われ、朱子学に典型的に見られる君臣、父子、長幼を区別した教育が行われ、そこには、ヨーロッパの啓蒙思想に見られるような、人間に対する平等思想、人権を守るという考え方は見られなかった。

アヘン戦争以後、中国の侵略と共に、西欧の啓蒙思想も中国に流入して来ることになる。

その基本は、人間平等と人権遵守の考え方であるが、イギリスによるアヘン流入により、アヘン吸飲問題が起り、ここに、伝統的な儒教教化の問題に加えて、アヘンによる人間疎外の問題などが新しくクローズアップされて来た。

そこで、本章においては、まず、一般的な生活における社会啓蒙組織について考察して行く。

すでに見たように、中国においては、儒教的な教化思想は見られたが、西欧風の一般的な社会生活における啓蒙思想は見られなかった。

しかし、変法期になると、独立富強の国家を作るための人材の養成の要請もあり、社会生活を有義義に行うべく、戒鴉片煙会などの設立が見られた。

もっともアヘン問題は、中国固有の問題ではなくそれは西欧がもたらしたのであったので、アヘン戦争以後、宣教師などにより、アヘン吸飲禁止の問題が取り上げられた。

それが、変法期に入ると、中国人自身の問題として、変法派によって取り上げられるようになる。

また、伝統的な中国の持っていた、人権問題としては、女性の問題、特にその纏足問題があったが、最初にこれを取り上げたのは、西欧の宣教師の夫人達であった。

これらの外国人の運動に触発され、変法期になると、富国強兵の人材養成の意図もあって、変法派により、不纏足会が組織されて行くようになる。

これから、各節において、社会生活における啓蒙的組織と女性に対する啓蒙的組織について見て行く。

第二節 社会生活における啓蒙的組織

すでに、概観において見たように、伝統的な中国においては、儒教の教化思想は見られたが、ヨーロッパにおいて、発達した啓蒙思想は見られなかった。

しかし、変法期になり、外国の侵略に抵抗し、独立富強の中国を形成して行く人材を養成して行くことが急務となると、変法派により、啓蒙的組織が作り上げられて行くことになる。

一般的な社会生活の啓蒙的組織の一つに延年会が見られた。これは、人生を一個の人材として、社

会に貢献するように切磋磨する組織であった。

また、すでに述べたように、アヘン吸飲の問題に関して、アヘン厳禁論が清朝によって取り上げられ、アヘン戦争となった。

この戦争に敗北した結果、皮肉にも、中国に濤々として、アヘンが流入するようになった。このアヘンの流入に対しては、清朝もさることながら、アメリカ人宣教師のキング牧師などが反対した。

変法期になると、独立富強の国を作るための人材養成のため、アヘンの禁止を訴え、変法派の人々によって、戒鴉片煙会が設立された。また、青年のための啓蒙的な報刊として『青年』があった。

ここでは、一般の社会生活の啓蒙組織の事例研究として、戒鴉片煙会を取り上げる。

第一項 戒鴉片煙会

はじめに

本項では、変法運動における学会の役割の事例として戒鴉片煙会を取り上げ、その設置、機能、参加者、意義等について考察して行く。

アヘンの問題は、中国近代史にとって大きな問題であったと思う。まず、イギリスのアヘン売り込みに対する、清朝側の対応の問題として、アヘン厳禁論、弛禁論、などがあったことは、よく知られている所であるが、結局、アヘン厳禁論が採用され、アヘン戦争となり、アヘン戦争に敗北の結果、中国が世界史の近代の中にまき込まれアヘンがいよいよ流入して来ることになる。

アヘンの問題について論じた著書や論文があるのでそれを紹介しながら問題点を明らかにして行きたい。まず『鴉片事略』^①であるが、これは、明の万暦年間から、光緒年間にかけてのイギリスのアヘン売り込みの過程、アヘンが中国に残した害毒、中国のアヘン対策、アヘン戦争後のアヘンの輸入状態、これに対する中国、イギリスの政策、世論などを概説したものであり、アヘンの問題の研究の手懸りとして貴重である。著者は李圭である。

最近、73年に台湾から中国史学叢書の続編の一として刊行されているので見易くなった。特にこの本の序言で林孟工氏が、

「アヘンが中国をして亡国滅種の危険に沈める最大の要素であり、洪水や猛獣の禍害が遠く比ぶべくもないことは、一般の人が洞見している所であり、多言を要さないだろう。」^②と云っているのが至言である。

その他アヘン問題を取り上げた著者としては天津日報から出版された『鴉片煙』^③があり、これに、アヘン問題の歴史、光緒32年の禁煙の上諭、同年の限禁鴉片煙章程、台湾におけるアヘンの問題などが載せられている。

その他アヘンの問題については、皇朝經世文三編にもその60巻に特に禁煙^④として特集されており、また、『知新報』、^⑤『湘報』、^⑥『万国公報』^⑦などにも散見できるので1、2例をあげる。

まず、皇朝經世文三編60巻では、鄭觀応が、「禁煙」と題して次の様に述べている。

「アヘンの害は深い。禁烟の議も又、おびたしい。始めてこれをあつかうには、急ぎすぎてもこれを失うが、ゆるすぎても、ついにこの不治の病気が連綿として宇宙に充塞して、その敗壞は收拾できずに今日に至っている」^⑧と述べており、アヘン問題の深刻さについている。

ついで張之洞も「不纏足会章程叙」^⑨で、阿片の害を述べ、労働力の低下を憂慮している。また、『万国公報』では、山雅谷が、「吸鴉片則不能有為論」^⑦を書き、アヘンの吸飲が人間を害うことを述べている。

さらに王爾敏氏も、その著、『晚清政治思想論』の中で、このようなアヘン問題に対して各地に戒烟会が設立されていることを述べておられる。^⑩

以上、アヘン問題の歴史と、戒烟会の設立について多少触れたが、第一に、その設置について考察する。

1、戒烟片煙会の設置

戒烟片煙会の設置については、徐勤の「戒烟片煙会序」によれば、

「今特にこの会を創始したのは、その輕薄な風を正し、日本の良法（明治維新においてアヘンを厳禁したこと）をつぎ、トルコやベトナムの覆轍にかんがみて、妖を食するのを戒めた。…こいねがはくば、八股文のことや纏足のことと共にアヘンを地球から絶滅すれば、個人も家も国家も儒教もともに強敵の患にすこし息をつくことができる。すなわち維新の様は、富強の本であり、またこれを基礎としている。」^⑪

とあり、この会は、日本が明治維新において、アヘンを厳禁した良法にならって、アヘンをやめようとしていることが知られ、八股文と纏足とアヘン吸飲をやめることにより、維新の富国強兵策に見習い中国を富強の国にしようとしている様子がうかがわれる。

また戒烟片煙会章程の第1条には

1、アヘンを吸飲する害は、人々が良く知っている所であるが、その習俗がすでに久しくなっているので、アヘン吸飲者の友人で、それをいましめる者もない。だから積弊は除きたいので、今特にこの会を設け、相互に戒めあって、この害をなくそうとするものである。^⑫

とあり、アヘン吸飲の害が周知の事実であることが述べられ、戒烟片煙会を設けることにより、たがいにいましめ合って、この害をなくそうとしていることが知られる。

なお、戒烟片煙会のことを知るのには、章程が便利であるので、さらに16条よりなる章程にもとずいて、論を展開して行きたい。

つぎに設置場所であるが、章程第10条によれば、

10、本会は、日本横浜中国大同学校に總會を置き、広東省城興隆大街公善堂、雙門底下街知新書局、香港華字報藩主筆房、澳門大井頭知新報、上海大馬路泥城橋大同訳書局、広西省城聖学会等の処に分会を作る。^⑬

とあり、総会が、日本横浜の中国大同学校におかれ、分会が広東、香港、澳門、上海、広西などに置かれたことが知られる。

また設立年代については、この戒鴉片煙会章程が、光緒24年閏3月21日の『知新報』第51冊に見えていることから、そのすこし前だと考えられる。

以上、戒鴉片煙会の設置について述べたが、つぎに戒鴉片煙会の機能について考察する。

2、戒鴉片煙会の機能

章程にもとずいて、戒鴉片煙会の機能について見て行く。まず、入会手続、入会者の義務について明らかにして行く。

章程第2条から第6条までと第10条、第14条には、次のように見えている。

- 2、入会者は、其の姓名、本籍、現住所、履歴書を書き、刊行に備え、会籍のために用いる。
- 3、凡そ入会者は、アヘンを吸うことはできない。もし入会后、なお例に犯く者がある場合は、同人を調査し、確かに証拠があれば、すぐに本会に報告し、当該者名を取り除き、永遠になかまにしない。その上機関紙を発行してそれに載せ、鼓を鳴らして之を攻めるの意を示す。
- 4、凡そ入会者であって、もし自主全権があるならば、家内、店内において、アヘンを吸う器具を備えることはできない。それに違ふ者は、犯例を論じ、その子弟および家の者達は、必ず嚴重に束縛されアヘンを吸うことはできない。
- 5、入会后は、必ず広く親戚か友人に勧め、その悪い習慣をやめ、みずから我が民族を強くしなければならない。
- 6、以前より、アヘンを吸飲し、すでに中毒が治った者は、必ずしも入会させない。アヘンをやめるのを待ってから名を報じて、入会を可となすべきである。
- 10、……入会したい……と思う者は、分会に往いて名を告げて入会を乞う……べきである。
- 14、凡そ入会の人の趣意書……は、其の地に近いところの董事に請い、董事から節あるいは月ごとに本会に送る。^⑭

とあり、入会希望者は分会に往いてその名を告げ、入会の許可を受けること、入会者の趣意書は董事を通して本会に送ること、入会する場合には、姓名、本籍、現住所を書くことになっていたこと、入会者はアヘンを飲まないこと、入会后アヘンを吸飲した場合には、永久に除名されること、入会者で、世帯主や店主である者は、家や店に吸飲の器具を置かず、その子弟、家族も厳禁されていたことが知られる。また入会后には、親戚や友人にも広くアヘンをやめることをすすめること、以前アヘンを吸飲していたものは、アヘンの吸飲をやめてからはじめて入会が許されることになっていたのがわかる。

つぎにアヘンをやめる良い方法などについて見て行く。すなわち章程第7条と第8条には、

- 7、本会の開会を俟ってアヘンをいましめる良法とアヘンをいましめる歌、アヘンをいましめろ

文を博く採り、みな輯めて本とし、全国に遍く送り、アヘンをやめるのを資け、もし家伝の秘法があれば、それを知らない者の為に本会に送られるよう切望する。手紙代としては本書を郵送する。

8、本会が将来送る所のアヘンをいましめる良法の各書は、広く伝播しないといけないので更に機関紙にのせて報告し、皆に周知させる。^⑮

とあり、アヘンをいましめる方法や歌や文章をまとめ、本にし全国に発送し、周知させるというのである。

ついで寄附や会計について見て行く。すなわち、章程、第9、第12、第14、第15条には次のように見えている。

9、本会例は、寄附を強いない。人々が従い易くして声気を広めようとするものである。もし寄附を喜んでする者があればそれを聴き、得た寄附金を随時機関紙に載せ、芳志を誌す。

12、本会が所得した寄附で使用したものを除いて残っている寄附金は、総会で保管し、将来善挙を創始する時の費用とする。それは商会、商報のような事柄である。

14、凡そ入会者の…寄附は、其の地に近いところの董事から節あるいは月ごとに本会へ送る。

15、本会は毎年金銭を若干集め、費用を支払う。それは皆明細書に書き機関紙に載せて大方の信用を得る。^⑯

とあり、寄附は強制しないで、寄附のあった場合は、当地の董事を通して本会に送り、得た寄附については、随時機関紙に載せ、余った寄附については、本部に保管し、将来の善挙の費用に備えることが知られる。また、日常的に必要な費用は会費を取り、それで当てており、ちゃんとした会計報告を機関紙にしていることがわかる。

つぎに章程第2、第11、第13条を通して、会籍について明らかにして行く。

2、前出

11、本会の発行する所の各草籍は、歳終を待つて総会に還す。総会は、名前を排列して総冊を設ける。

13、本会の草籍は、百人で1冊とする。……^⑰

とあり、会籍の内容としては、姓名、本籍、現住所、履歴書を書くことになっていた。また会籍としては、他の学会でもやっているようにまず草冊を発行する。百人で1冊とし、年の終りに総会に還し、総会で名前ごとに、排列して総冊とすることが知られる。

最後に役員について見て行く。

10、……あるいは董事になりたいと思う者があれば、分会に名前を告げて入会を乞い或いは、別に草籍を取り寄せ広く会員を招来すべきである。

13、……凡そ本会が発行した草籍は、人々に入会を勧め、1冊を満たす者は、董事に推し、10冊を満たした者には小分会を設けさせる。

16、総会は、司事6人を設け、分会は、司事、4人を設け、会中の各事の責任を持たせ、皆同志にその役を領したので給料は受けない。^⑬

とあり、役員としては、総会には董事と司事があり、董事は会員をふやし、草冊1冊を満たした者となる事が出来、司事は6人おり、会中の各事の責任を持っていたことが知られる。また分会には、分会長と司事があり、分会長には草籍10冊を満たした者になり、その下に司事が4人おり、会中の各事の責任を持っていたことが知られる。なお、これらの役員はいずれも給料を受けなかったことも知られる。以上、入会手続き、アヘンをやめる良法、寄附、会計、会籍、役員等、戒鴉片煙会の機能について述べたが、つぎに戒鴉片煙会の参加者について述べて行く。

3、戒鴉片煙会の参加者

戒鴉片煙会の参加者について表示しておく。

会中の役割	氏 名	出 身	官職 (又はそれに代る階層)
創 始 者	徐 勤	広 東	生 員

戒鴉片煙会の参加者については序を書いた創始者徐勤しか判明していないので、さしあたって徐勤について触れる。

徐勤については、湯志鈞氏によれば、次のように述べられている。

「徐勤は、字は君勉、広東三水県の人、邑庠生であり、康有為の弟子である。

光緒27年から28年の間、澳門の『知新報』の撰述に任ぜられ、『知新報』において、変報を宣伝するだけでなく、またすぐ、上海の『時務報』の撰文となり、その主著に、「中国の害を除くの議」がある。……その中で科举制度を弾劾して封建統治者段階はそれを見て憤った。……

24年戊戌、日本横浜の大同学学校長に任ぜられる。……^⑭

とあり、彼は、広東省の人で、階層としては未流の生員であり、康有為の弟子で、『知新報』、『時務報』に関係したこと、横浜の大同学学校長になったことが知られている。また思想的にはかなり、ラディカルであったことがうかがわれる。

4、戒鴉片煙会の意義

すでに述べ、また周知のようにアヘン吸飲は、健康によくなく、労働力を低下させ、人を廃人にし、ついに死に至らしめ、国力も失なわせかねない深刻な問題であった。

それがアヘン戦争前から嚴禁論を存在させた理由であり、中国にとって懸案の事項であった。

変法派の人達も当然この事に目をつけ、健康維持と労働力の確保による中国の独立富強も願って、この戒鴉片煙会が作られている。

戒鴉片煙會が変法期の学会の中で果たした役割は、啓蒙的なそれであったと云えるが、この運動は当然変法期の学会だけの問題ではなく、中国近代史の中において連綿として続く重要な問題であり、近代史上においては、戒鴉片煙會は禁煙史の一頁をかざるものであり、その役割には大きなものがあつたと云えよう。

その証拠に、王爾敏氏も次のように云っておられる。すなわち、

「清代には、各地で成立した所の戒烟會ははなはだ多く、すでに筆者の見る所でも、桂林、廣州、香港、澳門、杭州、嘉興、長洲、太原、豐鎮、興寧、瑞州、広豊、武寧、鉄嶺、磐石等にある。もとより、すでに相当多い。光緒30年以後は、各地に官立の戒烟局が多く戒烟會を名としており、また多くの戒烟會が、戒烟局所と改められており、後のこの類の局所は各地に皆設けられ、羅列するにたえない……」²⁰

とあり、清代には、各地に戒烟會が設立され、光緒30年以後は、官立の戒烟局が各地に設けられることになった。

又宣統2年にも、中国国民戒烟總會が設立され、激しい禁煙運動が展開されている。²¹

以上、戒鴉片煙會の意義について考察した。

おわりに

戒鴉片煙會について言及して来たが、アヘン問題の深刻さと、それに対する戒鴉片煙會をはじめとする戒烟會の対応がみられ、アヘンの問題は近代史上、重要な問題であり、今後も研究されなければならない問題だと考えられる。

その際、問題となるのは、官立の戒烟局、中国におけるアヘン栽培、それに対する課税、アヘンに関する外交関係等を含むアヘン禁止運動の歴史だと思われるが、それについては今後の課題としたい。

次節においては、女性に対する啓蒙組織について触れる。

第三節 女性に対する啓蒙的組織

すでに、第二章第三節で見たように、従来婦人の徳は才能のない事であり、生産労働を行わず、分配を受ける立場に甘んじていた。

しかし、変法期になると富国強兵のために女性も教育しなければならないという考えが起り、女学堂などにより、その教育も実践されるようになった。

しかし、女性の人権は、また十分尊重されておらず、宋代からの纏足の苦しみにあえいでいた。

この纏足の苦しみから、中国女性を救おうとして最初に立ち上がったのは、第一節で見たように、同性である、外国人宣教師の夫人達であった。

変法期になると、変法派の人達も、女性の人材に目をつけ、独立富強の中国を作り上げて行くため、

纏足反対の運動を行うようになり、それは各地に広がり、特に変法派の子女達を率先して、その会に入れるようになった。

今、女性に対する啓蒙運動の事例研究として不纏足会を取り上げる。

第一項 不纏足会

はじめに

変法運動における学会の役割の事例として本項では、不纏足会を取り上げる。ここではまず、不纏足会の先駆として、天足会に触れ、ついで不纏足会について述べ、最後に不纏足会の学説史的なまとめと本小論の執筆順序を明らかにして行く。

まず不纏足会成立以前に新教、旧教の外人宣教師、ならびにその伝道団体により、纏足の持つ非人道性が明らかにされ、纏足反対の運動が起こされている。

ティモシー・リチャードの自伝によれば、天足会が厦門において、最初、ロンドン伝道教会のマックグワン夫人により始められ、それがアーキーバルト・リトル夫人の手によって1895年4月再出発されたことが知られる。この天足会にはリトル夫妻が中心となり、リチャード夫妻も協力していた。そしてこの会の主旨は、キリスト教的人道主義にもとづく纏足の禁止であった。^①

このような状況の中で変法派の梁啓超などが不纏足会を設立したのであったが、今変法派の不纏足会を考察するに当たって、今までの学説史的な整理を簡単に試みて置きたい。

すでに述べたように、A・リトル夫人などにより天足会が設立されたが、この間の事情については、リトル夫人の著書“Intimate China”に詳しい。^②またリチャードもその自伝の中で天足会、不纏足運動について云及している。^③

ついで変法期の梁啓超等も不纏足会を設立し、その叙などを書いているが、その背後には、富国強兵策の一環として女性の労働力を獲得する意図があった。^④

変法期に自ら不纏足運動に参加した人としては、康有為の孫、康同壁がいる。彼女は、「清末の不纏足会」^⑤という論文の中で、祖父康有為の回想を述べ、不纏足運動の女性解放史上における意義を明らかにしている。

ついで菊池氏の論文は、^⑥清朝の纏足の流行についてまず述べ、ついで西欧人の不纏足運動に触れそれがキリスト教的な人道主義に立つものであることを明らかにし、変法期の不纏足会が女性解放と婦人教育、富国強兵策の3つの側面を持っていたことを指摘している。

最後に小野和子氏の論文では、^⑦変法派の不纏足運動を女性解放運動の中に位置づけることから説き起し、革命派の秋瑾女史、無政府主義者の何震女史にまで言及している。

本項では、変法運動支持者によって担われ、婦人解放の一翼を担った不纏足会の実態を、不纏足会の設置、機能、参加者の面から明らかにして行きたいと考える。

そして最後に変法運動における不纏足会の意義についても述べて見たいと思う。

1、不纏足会の設置

すでに述べたように外人宣教師夫妻たちにより1895年天足会が再会されたが、康有為の自編年譜によれば、同年彼は弟康広仁と中国人の手になる最初の不纏足会を広東の省城に設立している。^⑦その後、光緒23年に上海に總會としての上海不纏足会が設立されるに及び広東不纏足はその分会となっている。

いま、梁啓超の試弁不纏足会簡明章程により、上海不纏足会の第1条、立会いの大意を見るならば、

1、この会の設置は、纏足をするようになった習慣をたずねると、もともと人情にかなうところではないが、ただ、この習俗がすでに久しく行われているので、このようにしなければ、結婚をすることが困難となったためである。そこで特にこの会を創設し、会中の同志が互いに婚姻を通ずるべきであり、遠慮してはならない。そしてどうかこの美風を、段々と広め、纏足の軽薄な風習を革めたい。^⑧

と述べており、纏足が、ヒューマニズムから出たものでなく、只習慣で長い間、続けられており、もし纏足をしなければなかなか結婚が出来ないので、不纏足会をもうけ、会中の人々が互いに結婚できるようにし、このような纏足の悪風を早く革めようと訴えてることが知られる。

ついで、上海不纏足会の設置については、梁啓超年譜に

「6月（光緒23年）、汪穰卿、麦孟華等と不纏足会を上海において、創弁した。当会は、時務報によって発起し、後に大同訳書局に、事務等が引き継がれたが、康広仁に之れを経理させた」^⑨

とあり、光緒23年、6月、まず上海において、梁啓超が、汪康年や、麦孟華とはじめて開いたことが知られる。また、不纏足会は、『時務報』を媒介として開かれたこと、その後、事務が大同訳書局に引き継がれ、康広仁が経理していたことが知られる。

設置場所については、梁啓超の『戊戌政変記』によれば、上海、広東、湖南、福建、新加坡であり、^⑩『皇朝経世文新編』によれば、広東の順徳、南海96郷でも組織されたことが知られる。^⑪ついで菊池氏によれば、広東では、省内に前述の順徳、南海96郷のほかに侖城、仏山、香山、大良、陳村、赤化などに設置されたことが知られる。^⑫また王爾敏氏によれば、広東ではその他に広州や龍山にも分会が生まれ、湖北では、武昌などに分会が設置されたことが知られる。^⑬

2、不纏足会の機能

不纏足会の機能を明らかにするならば、章程として前述の立会大意、入会章程、会籍章程、開会章程、経費章程があり、それによりその大体が伺われる。

今各章程について検討して行く。まず入会章程について考察すれば、この章程は以下の6条よりなっている。すなわち、

2、凡そ入会者に生れた女子は、纏足することはできない。

3、凡そ入会者に生れた男子は、纏足の女と結婚することはできない。（これは、入会后男子を

生んだ場合を指しているものであり、入会前男子がすでに長じて成人していれば、不纏足の女を娶る可きではない。あるいは入会者がまだ小さいければ、配偶者を択ぶことはむずかしいので、この例ではない。)

4、入会者に生れた女子は、其の子がすでに纏足していれば、8歳以下ならばすべからく一律に解くべきであり、もし9歳以上で解くことのできない者は、みな会籍報において明らかにし、会中の人達と婚姻することを准してもらふべきである。

5、入会者は、其の姓名、年齢、本籍、住所、職歴及び妻の姓、子女の名を書かなければならない。(未だ結婚の定まっていないう者は皆、名前を報告し、すでに結婚の定まっている者は名を報ずる必要はない。)それを掲載して会籍の用に備えるべきである。(其の方式は別に付して帳面に列す)

6、入会后、子女の生まれた場合は、その時々名を報じ、続刊の会籍に備うべきである。

7、入会して名を報じた後は、本館から女学を勧めるの歌一本を贈り、入会の証拠とする。^⑭

とあり、入会者が女子を生んだならば、纏足はできないし、男子を生んだ場合は、纏足した女と結婚させることはできないという原則が見られる。また入会者の子女が8歳以下の場合には、一律に纏足を解かせ、9歳以上で纏足を解くことが不可能な場合には、その旨、会報に書くことになっていたことが知られる。その他、入会者の氏名、年齢、本籍、住所、履歴、妻子の姓名なども書くことになっており、子女が生まれた場合にも、その度ごとに会報に載せることになっており、入会者には「女学を勧める歌」が贈られていたことが伺われる。

つぎに会籍章程は、2条より成り、

8、会籍は、姓で冊分け、百人で一冊とし、毎年1回印刷して入会者の家に配分する。

9、開会の始めは、同志各々が持っている一つの籍によって入会を勧める。これを草籍という。草籍は、姓名をもって一冊としていない。その年の終りに草籍を総会におさめ、族姓によって排列して清冊を校正する。これを正籍という。^⑮

とあり、姓で冊に分け、百人を一冊として毎年、会籍が発行され、入会者の家に配布され、入会者はすべて登録され、会籍を有することが本体となっていることが知られる。

つぎに開会章程は6条より成り、

10、本会の総会は上海に設け、暫くは、時務報刊を借用して仕事を始め、各省に皆、分会を設ける。各州、県、市の集まりで入会人の多い所では、時に随って小分会を設け、その所在地は、続々と報に登場させ、皆に通告する。

11、各総会、分会には、その地に随って皆主会、副主会を立て、本会に功德の有る者をこれとし、或いは、董事の公挙による。定員はなく主に会例の編修をし、清冊を調査し、もし女学、刻書等の事を兼務しないならば給料を受けない。

12、各総会、分会に皆董事を設ける。定員はなく、主に人に入会を勧め、また会例を議論して定

め、督弁、会弁は皆同志をもってこれにあずからしめ、給料は受けない。

13、総会には、司事4人を設け、分会には司事兩人を設け、小分会には、司事1人を設け、主に各処の報名簿を収める。

1 族性によって排列し、会籍を印刷する。

2 会籍を入会した家に分配する。

3 資金を寄附した人の姓名を並記する。

4 毎年出入の清冊を刊行する。

5 司事には、給料が見はからいで支給される。(もし入会者が多事繁冗ならば、時に随って議して司事を増設する。)

14、本会の草籍は50人を以って1冊とする。本会では草籍を借り出して人に入会を勧め、1冊を満たした者があれば、すなわち、推して董事とし、10冊になれば、すなわち小会を設ける。

15、各会の司事については、主会、董事が人を択び使用する。

とあり、不纏足会の総会が上海に設置され、各省に分会が設けられることになっており、各州、各県、各市で入会者が多い場合には、そこに小会を設けることになっていた。また会を運営する役員としてはまず、総会、分会それぞれに功績のあった人が、主会、副主会に立てられ、会例の編修、清冊の調査に当たるが給料は貰わない。ついで、各総会、分会に董事が置かれ人々に入会を勧め会例を定める。この中から督弁、会弁を決めるが給料は受けない。さらに総会、分会、小分会に司事を置き、機関紙や、入会者の名簿の作成に当り、給料を支給されていることが知られる。

経費章程は5条より成り、

16、本会が建設した会所では、司事に請うて会籍と女学を勧める歌の本を印送する。

費用が大変多くなり、方法を講じて援助をしなければならなくとも、他人に寄附を強いるのは宣しくないで、その人の入会を准し、入会者が寄附を願えば寄付させる。寄附はその額の多少については拘泥しない。数百銭の少ない寄附でもよいし、寄附をしなくてもよい。

17、この会がもし、推行されて日々広がれば、それに要する費用も益々多くなるが、入会の時、寄附金が甚だすくなく、経費が支払えないのではないかと恐れる。国内の道理に精通している人達が、好んでその徳を行い、慷慨して援助を望み、その成に賛成するならば、天下にとってこんなに幸いなことはない。

18、援助金、1百両の者は公けに推して主会とする。10両以上の者は、公けに推して副主会とする。主会、副主会は、毎年姓、字、官位を機関紙にのせる。援助金が5百両以上の者は、将来、会館の中に神主を設け、これを祀り、永久に供え物をし、その高德をおぼえる。

19、本会は、毎年資金若干を集めると、皆それを目録にのせ、会籍につけたあとで、入会の家に配分し、機関紙にのせて、その大信を昭らかにする。

20、本会が収めた入会金や寄附金は、年ごとにしらべて、経費を実たし、目録に載せた外にも余っ

た金子があったならば、女学校や、母子の新聞社、母子医院や、身よりのない寡婦を救済する場所を設けるのは皆、臨時の会議による。将来、会が所有している一切の利益は、会中の人達に平等にうるおすことができる。^⑪

とあり、会を維持発展させるために寄附金をつのっていること、また寄附した者の行為を永く覚えてそれをたたえ、記録に残すこと、もしゆとりがあれば、女学校や母子の諸施設を作ること、会の利益は、会員が平等に受けられるようにする意図を有していたことが知られる。

最後に湖南省の不纏足会に見られる嫁とりの実際についての湖南不纏足会嫁娶章程に触れておく。この章程は、10条よりなり、次の様に見える。

第1条 本会の立会いの主旨は、もともと会員の人達が互いに結婚を行い、纏足をしていないという理由で世間に見棄てられないようにしたものである。だから会籍は、姓で冊を分け、男女と年齢をはっきり載せ、会員が婦人を招き嫁とするのに用いる。今この意味で不纏足会の嫁娶章程を定める。

第2条 この会で皆互いに婚姻を通すべきであり、会外の人で纏足をしていない者が婚姻を通ずる以外は婚姻を通ずることはできない。

第3条 この会は、互いに婚姻を通すべきであると云っても、必ず年輩が相当すべきであり、両家が真心から願うならば可能である。ある1つの家を任意に指して同じ会員であるからという理由で強いて結婚させることはできない。

第4条 同じ会の人でも戸籍は一つではなく、平素両家の心が会い、両家の中に能力があり遠くに行くことのできる者は、結婚した方が良い。志士は遠くへ嫁に出すのをきらい俗見を破除すべきである。

第5条 結婚を定める時、媒約の婚書をもって証拠とし、古式に似せて雁を礼物として用いようとする気持ちがあれば数種類の礼物を備える。しかし、家の暮し向きに関係なく、いかに豊かな家でも、総て簡略を宜しとし、女の家は、すこしも結婚の礼物をねだることはできない。

第6条 女の家はかがみ箱を置くのを簡略化し、男の家では嫁のかがみ箱が厚くないのを、にわかにおとっているとすることはできない。

第7条 婚姻の礼は廃絶されて久しい。古礼はすでに現状に適していない。大清通礼によるのも固より可能である。どうしても世俗に従わざるを得ない時にはそうするものも良いが、なるべく簡便なものを招き用うべきである。

第8条 纏足をしない女の場合、その衣飾は時にかなったものを用いるべきである。靴と靴下をつけて男装と同式にし、このきまりは、会員が皆一律にし、奇異に思われてはならない。会員がいぶかるなら、いよいよ結婚はしにくくなる。

第9条 世のすべての男性で娘が賢くなるのを願わない者はないであろう。娘が学べば、よろずの事をときあかさなければならない。自分に娘がいなければ、自分の妻の賢くなるのを願わ

ない者はない。だから資本を出してその地方に女学塾を建てることを提唱する。塾の大小は、その力による。他人の娘が学ぶのを助けることが、自分の妻の学ぶことを助けることにならないとどうしていえよう。だから必ずまず女学が盛んとなり、その後に婚姻の本がただされるのである。

第10条 以上の章程は、その遵守して行い易いものを択んで実質的にならべたものであり、美し
いかざりはしりぞけて、人々が皆理解してくれるように努めたものである。もしこれらの事が
遵守できないなら、何のために入会したかを復習すべきである。だから、はじめの入会の時に、
このようになることを考えて、後悔のないようにすべきである。^⑮

とあり、1条から8条まででは、不纏足の人達が結婚可能なために作った組織であり、お互いの真
心と理解のもとに簡素な結婚を勧めており、第9条では、正しい結婚をするために女子の教育をその
基礎として提唱している。第10条では、これらのことを遵守することを勧めている。

以上、各章程により、不纏足会の機能を明らかにして来た。すなわち、入会者が女子を生んだなら
ば纏足はさせられないし、男子を生んだ場合には纏足した女と結婚させることはできないという原則
があり、入会者は会籍に登録され、総会が上海に置かれ各省に分会が設けられ、役員には、主会、副
主会、董事、督弁、会弁、司事などが設けられ、司事は実務を行い給料を出すことになっていた。ま
た不纏足の人達が結婚できる組織を作り、女子教育も提唱されている。

つぎに不纏足会の参加者について考察する。

3、不纏足会の参加者

前述もしたように不纏足会は、中国各地に作られたが、ここでは、総会である上海不纏足会の参加
者の階層構成をケーススタディとして考察して行く。これにより不纏足会一般の参加者の階層構成の
手掛かりとしたい。

史料により、上海不纏足会の参加者について表示して置く。

氏 名	出 身	官職 (又はそれに代る資格等)
袁 世 凱	河 南	浙江温処道
汪 康 年	浙 江	進 士
麦 孟 華	広 東	举 人
梁 啓 超	広 東	举 人
張 通 典	湖 南	知 県
鄒 陵 翰	江 西	部郎部名不詳
吳 樵	湖 南	
康 広 仁	広 東	(康有為の弟)
譚 嗣 同	湖 南	候補知府
龍 沢 厚	広 西	知県県名不詳

頼 振 寰		
張 壽 波		

上海不纏足会に参加した者でその名が判明するのは12名にのぼっており、道員（正4品）1名、部郎（正5品）1名、候補知府（正5品）1名、進士（従7品）1名、挙人2名、未流2名、不詳3名である。その半数が中下級官僚であったことが知られる。

その派別を見れば、¹⁹袁世凱は日和見主義者で仮維新系、麦孟華は右派の麦孟華系に、梁啓超は中間派の康梁系に譚嗣同は左派の譚嗣同系に属している。すなわち、上海不纏足会は右派、中間派、左派の合同により形成されていたと云ってよいだろう。

つぎに出身地を見れば、河南1名、浙江1名、広東3名、江西1名、湖南2名、広西1名、不詳2名であり、広東の人が1番多くそれについて湖南の人達となっており、広東の康梁系、麦孟華系と湖南の譚嗣同系の合作であったことが知られる。

4、不纏足会の意義

以上、不纏足会の成立の過程とその内容について見て来たが、清朝末期の中国社会において、纏足の廃止を唱えることは、勇気を必要とすることであり、大変困難な業であったと思われる。またたとえ梁啓超の考え方の中に富国強兵策の一環として婦人の労働力に着目した面があったとしても、当時の中国からすれば未曾有の事であり、これは女性観を根本的に変えることにつながる。このような考え方の不纏足会が中国の各地につくられたことは中国の近代化にあずかって力があったと思われる。この点で特に譚嗣同が書いた湖南不纏足会嫁娶章程は高く評価されて然るべきだと考える。すなわち彼の考えの根底には女性の地位を高めようとする考え方があり、また女性が学問し、纏足から自由にされ、自由な一個の主体となるよう意図していたことがうかがわれるのである。

かくして変法期における学会の運動の中で不纏足会は女性の解放とその地位の向上をめざした中国の近代化に啓蒙的役割を果たすものの一つとして評価できるであろう。たとえ戊戌政変によって不纏足会が禁止されたとしても、この新しい女性解放の思想は次の新政運動において、復活するのである。またこれは小野和子氏も云われているように女性解放史上の一時期をなすものと見る事ができるのである。

おわりに

以上、宣教師から中国人変法派の手にゆだねられた不纏足会のあらましを考察した。

まず、不纏足会は、纏足の悪習をやめるために光緒23年、上海に総会が設けられ、それが各地に分会、小分会として、普及していったことが知られる。

機能としては、女子が生まれたならば纏足をしないし、男子が生まれたならば、纏足の女子とは清

婚しないことが前提とされ、入会者は会籍に記録され、数種の役員が置かれ、不纏足会の会員が結婚できる組織を作り、女子教育が提唱されさせていたことが明らかになった。

参加者としては変法右派、中間派、左派の合同による中下級官僚によって構成されており、とくに広東不纏足会には、広有為の孫が実際に加入している。またその出身地としては上海強学会においては、広東、湖南にかたよりが見られる。

不纏足会の意義としては女性解放の運動の一環として考えることができ、変法期の学会の性格としては、啓蒙的な役割を果たしたことが知られる。

最後にこの不纏足会の運動は政変によって弾圧されたが、その勢いをおさえることはできず、1903年頃から新政運動の一環として復活するようになり、一段と婦人の解放運動を高揚させ革命運動に接続して行くのである。

第四節 ま と め

第三章第一節では啓蒙的組織の概観を行い、第二節として戒鴉片煙会を取り上げた。同会は、アヘン吸飲をやめ、労働力を確保するため光緒24年（1898年）に設立された。総会が、日本横浜の中堅大同学校におかれ、分会が広東、香港、澳門、上海、広西などに置かれた。機能としては、会員は登録され、会籍が明らかにされた。役員としては、総会には董事、司事が置かれ、分会には分会長、司事が置かれた。戒鴉片煙会の性格は、啓蒙的な役割であったが、労働力を確保する経済的な側面も意識された。

第三節では、女性の啓蒙的な学会として、不纏足会を取り上げた。不纏足会は、纏足の悪習をやめさせるために、光緒23年（1897年）上海に不纏足会の総会が設立され、各地に分会、小分会として普及した。機能としては、女子が生まれたならば纏足をしないし、男子が生まれたならば、纏足の女子とは結婚しないことが前提とされ、入会者は会籍に記録され、不纏足会の会員が結婚できる組織を作っていた。

参加者は、変法各派の中下級の官僚によって構成されており、上海不纏足会では広東、湖南に出身地のかたよりが見られた。その意義としては、女性解放の一環として、啓蒙的な役割を果たしたと考えられる。